

第7回 高槻市学校教育審議会 要点録

日時:令和7年5月30日(金) 午後3時～ 場所:総合センター 教育委員会室

出席委員

蛭田 勲 会長、一柳 康人 副会長、城下 英行委員、津田 和美 委員
鎌田 ひとみ 委員、宮本 剛 委員、山本 新一 委員、高木 祐樹 委員、安盛 啓史 委員
田中 健文 委員、八尾 洋美 委員、山田 めぐみ 委員、入江 隆男 委員

議事及び具体的な意見

【 1. 義務教育9年間の育ちと学びの連続性を保障する教育環境整備 ～安全・安心な学校づくりについて】

・事務局より説明

〈 今後の児童生徒数の推移 〉

○義務教育学校になると、各学年の人数が今より増えるだけではなく、縦の繋がりについても豊かになるような取組が設定しやすくなる。今後、先行して設置する中学校区を考えていく際には、子どもの数が減少している地域の実態も踏まえて、子どもの数の推移も観点の一つとして考えてほしい。

○通常学級以外に、支援学級が非常に増えてきている。昔と比べると種別も多くなったので、現場にとっては大変苦しい状態である。そして、2030 年に導入される次期学習指導要領の改訂の大きな柱の一つとして、学校や教育委員会が行う教育課程、カリキュラム編成の柔軟化が挙げられている。児童数についても柔軟に取り組めるよう、お願いしたい。

○1つの中学校に2つの小学校という「1中2小」よりも、義務教育学校として1つにすることで、クラスは各学年減ったとしても、1年生から9年生までの9学年の縦の繋がりというのは広がる。たくさんの仲間や多様な人と関わり合えるという意味でも、そういう機会を保障するという意味でも、義務教育学校になる意義をイメージすることができた。

○1学級の子どもの人数だけではなく、学校全体の人数が少ない方が、一人ひとりに応じた

きめ細かい教育ができるよさがあると捉える方もいるかもしれないが、子どもの人数が少ないということは、子どもの多様な関わりが少なくなるということにもなる。

学級数についての話があったが、子どもの数が少なくなると学級数も少なくなり、その結果として学校に配置される教師の数も減ってしまうため、担任の先生以外の先生との交流の機会も減っていくということにも繋がる。結果として、多様な他者と交流する機会が減ってしまうのではないかという心配もある。

また、子どもの人数が少なくなると、すべての学年が1学級になってしまう、もしくは、複数の学級があったとしても1クラス当たりの人数が少なくなってしまうため、人間関係が固定化する可能性もある。

○適正規模というものはなかなか決められないと思うが、あまり多すぎると、きめ細かな学習指導や9学年全体で活動していくときに、その人数の多さが障壁となり、なかなかスムーズに進められないということもある。

この推移を見ていると、少子化ということもあり、多くて各学年2学級ぐらいかと思受けられるが、2学級ぐらいが適正であり、小と中の連携をもう少し緊密に取れるのではないかなと思う。

○(小さな規模の学校でも)校務分掌や委員会の数は変わらないため、1人あたりで持つ委員会の数が増えるという状況にもなる。

○将来的に高槻市内の様々なところで義務教育学校を展開していくことを考えると、まだ大規模になりそうな校区と、中規模になりそうな校区と、小規模になりそうな校区では、それぞれの雰囲気や教育のやり方、学校運営のあり方などはどう考えても同じにはならない。
いくつかの規模に応じた義務教育学校のあり方も検討しておいた方がいい。

○(学校規模について)1校目はどこに照準を当てるのか、見通しも持っていきながら、最初はどこに照準を当てていけばよいということも考えの中にあってもよい。

○実際作った後に児童生徒数が爆発的に増加するという状況もあるということを考えると、学校の人数を想定しても、どうしても上振れするとか下振れするということがあるのだろうと思う。そのような点でも、様々な規模に応じた教育のあり方というものをしっかりと検討しておけると、学校が大きくなっても、小さくなっても、検討したものを活用、参考にできるのではないかと思う。

〈 通学距離等の地理的環境 〉

○どの中学校区に設置されるとしても、通学路の安全性を保障する市の取組はぜひ継続してほしい。学校としてできることは、現在行っている安全教育や、通学指導を着実に行うことである。通学路の安全指導を起点に、9年間を見通した安全教育を展開していけるといい。

○民間の幼稚園、保育所、認定子ども園はバスが家の前から出て園まで送迎しているところもあり、子どもたちの交通ルールを守って歩く機会がすごく減っている。自分で自分の身を守れない子どもたちがすごく多くなっていくことを心配している。

現在もセーフティボランティアさんが要所に立ち、子どもたちに声をかけ安全を確保してくださるが、就学前から、通学指導、交通ルールなども身につけること、歩く体力をつけることなどは心して取り組んでいきたいと思う。

○小学1年生から中学3年生までという幅があり、特に都会の場合、小学1年生にとってこの(国の)基準がどうなのかと疑問に思います。

非常に危険なところをどうするか。(子どもがルールを)守らないことで事故が起きやすくなるなど、様々な面も考えていけないといけない。

それから、通学路が変わることによって、車の時間規制が生じるかもしれない。時間規制が生じると、今まで通れていた車が通れなくなり、朝の短い時間帯の中で、地域住民がものすごく遠回りをしないといけなくなるという問題が今でも起こっている。

○PTAとして保護者で夏休み前に通学路を全部チェックする。周りの地域の大人がしっかり考えてあげないといけない。子どもなので、なかなかそこまで視点が広がらないし、特に小学生は背が低く見える範囲も違うため、その辺りも考慮しなければならない。

○登校時の子どもの様子を見ていると、やはり視野が狭い。これから新しく通学路を選定する際には、やはり学校だけではなく、それを見守る地域の方の援助が必要である。特に、セーフティボランティアの数がどんどん減っていくので、ここは危ないという箇所に配置できず、危ない目に遭った子どももたくさんいるかと思う。

また、通学路の選定の際に、地図上だけで決めてしまうと、どうしても危険箇所を見落としがちになってしまう。そのため、実際に選定する際には、地域の方の意見を聞き、実際歩いてみて、選定していくことが大事ではないかと思う。

○PTA活動を縮小し、機能していないような状態のところが複数出てきている今、義務教育学校を進めていく中で、新たな通学路を選定する際に、従来のPTAに協力していただいていた形でやっていくことが不可能なところが幾つも出てくるだろうと考えられる。

○子どもの好奇心にアプローチをして子どもたち自身で安全を守ってもらうことは大切だと思う。通学路のことを一番よく知っているのは子どもたちであり、セーフティボランティアの減少はどうしても避けられない社会状況であると思うので、子どもたち自身が集団登校することによって生まれる新しい安全意識もあるのではないかと感じている。

〈 学校施設の現状・地域の防災拠点としての機能 〉

○高齢化しており、拠点が遠くなれば地域の拠点として活動するにも、行きたくても行けないという人が出てくる。

○(施設の安全性が保障されているのであれば)義務教育学校設置の選考をする上で、施設の新しさや古さの観点については、あまり優先度は高くないのかなと思っている。

また、施設面における多様な子どもへの配慮については、部分的に取り入れることで実現

できるものではあるかと思う。ただ、部分的に取り入れるよりも、新しい教育観が校舎全体から感じ取れて広まっていくことがより良い環境かと思う。ぜひ、予算の許す限りではあるが、高槻市も新設の義務教育学校があればと望んでいる。

○学び手である子どもたちを主体と考えたときに、教師が説明する以外の多様な学習形態の工夫というのにも必要になる。(学習空間の例のように)子どもたちの豊かな表現や、そういった機会を生み出せる環境として、こんなところがあればいいなととても魅力を感じた。多様な他者と関わる機会として、異年齢や地域の方との交流を考えたときに、こういう学習空間があれば子どもたちの可能性を広げる学習活動に繋がられるのではないかと思う。こうした学習空間を共有することで、教育観が随分変わっている、変化しているということを大人も子どももお互いに感じ取ることができるのではないかと思う。

○物理的な制約がなかなか大きい学校においては、「新しい学び」というのはすごく展開しづらいと思う。

○与えられた環境でどれだけいい授業をしていくか、どれだけ指導していくかという、教職員の資質を磨くという意味で、やはり校長の役割というものは大きく、学校に課せられた課題だと思っている。

そういう意味で、この義務教育学校というものは、校舎はともかく仕組みとして、人と人が繋がり、多様性の中で子どもたちを育んでいくという意味においても、非常に可能性のあるスタイルなのだろうと思う。

しかし、視察に行って、やはり施設も大事だなと正直感じた。人と人を繋げる仕掛けがちゃんと施設にある。そういった施設を整備することで、可能になっていく、さらに可能性が広がるということもあるのだなということを勉強した。

○防災という観点で、学校の数がもし減ると、地域の避難所も、数も変動していく。緊急時の指定の避難場所ということもしっかりと整理し、もし新しく建てることになった場合、この義務教育学校における防災の仕組みということも視野に入れて考えていただきたい。

○学校という機能のみならず、地域の一つの拠点という観点が大事だと思う。視察先は、学校に隣接しているほぼ学校の一部のような形で、公共の施設としての機能を持っていた。多様な方々が学校を核として関われる、1年生から9年生までの9年間もちろん、それ以外のときであっても多様な人が関われる、使える、利用できるというのは非常に大事ではないかと思った。

○(家族に発達障がいを抱えている学生がおり)災害のときの避難の問題を調べたところ、環境が大きく変わるということは、避難を非常に難しくする要因だということがわかった。

そういった点でも、日常的に「どうぞ使ってください」という場所になっているということは、本当の意味でのインクルージョンを進めていくという点でも非常に大事ではないかなと思う。日常的に閉じていないということは、非常に重要ではないかなと思う。

ぜひ、防災を考えていく上では単なる学校ではなく、地域の一つの中核となるような施設として構想されると、いろんな人にとって、できてよかったなという施設になるのではないかなと思う。

○跡地の利用も、目を向けていく必要がある。それは防災の意味でも、或いは、地域の活動などの様々な形で集まる機会があったとしたら、それをどう扱っていくのかということも含め、セットで考えていく必要もあるのかなと思った。

(資料 36 ページの写真について)豊中の学校で見たように、学校に隣接するところに複合施設があり、非常に魅力を感じた。こういったところがあれば、地域の活性化にも繋がっていき、学校教育がどんどん広がっていった地域のものになっていくという一つのきっかけにはなるのではないかなと思う。

公共の施設が連携しながら学校が発展しているという例は全国的にも大いにあると思うが、本当にそれが機能をしているという例も、教えてほしい。

○防災の話について、特に高槻の場合は、水害の際は使えないという小学校、中学校がたくさんある。せっかく義務教育学校を建てるのであれば、どう対応できるのかということも踏

まえた設計があると非常にいい。

○就学前施設もそうだが、支援を必要とする子どもがすごく増えている。

資料の 17 ページにあるような、とても広い空間で、いろんなところでいろいろなことが一度に起こるということは、支援が必要な子どもにとっては、混乱を起こしてしまうのではないかと危惧している。

視察した豊中の施設のように、空間も多様化してほしい。狭い空間や、落ちつける、クールダウンできる空間があるといい。一つの教室から幾つかの空間に分けることができるような工夫をして、どの子どもも安心して9年間通うことができ、一日を過ごせるという空間があるとありがたい。

○良いものを作ったとしてもどうやって使えばいいかわからなくなったというのが一番もったいないことに繋がってしまうと思う。可変的な部屋、もしくは空間を作るにあたっては、その時なりの更新ができるような形で設計されればいい。

○デザイン的にはすごく画期的で、カッコいいものということで新築当時はよかったのだろうが、メンテナンス等を考えた、維持管理をしっかりしやすい観点で設計しないといけない。

○この義務教育学校に対しての注目が非常に高い中、やはり皆さん不安を抱えている。義務教育学校を作ることで、マイナスに走るようなものがあるのではないかという観点や危機感というものを持たれている。高槻市バージョンでいいと思うので、選択肢をイメージできるような資料を提供することで、否定的な意見を持たれる方にも、何かしらポジティブなイメージが生まれてくることがあるのではないか。

最終的には地域の理解が一番大きなポイントにはなると思うので、しっかりと合意形成していく過程として、そういう情報収集も含めて示してほしい。

○公立の学校は小学校も中学校も子どもたちが清掃するという点も考えておかないといけないと思った。限られた時間の中で子どもたちが行うので、細かい箇所の清掃はできない部分もある。先ほど委員のご指摘があったように、メンテナンスの問題、設備が壊れる原因

にも繋がっているのだろうなと思う。子どもたちが清掃するという前提で、施設を設計する必要があると思う。

【 2. 次回の審議に向けて 】

- ・第8回以降の審議内容、今後の審議会スケジュールについて

本日の意見を踏まえ、第8回以降の進め方について、改めて検討することを確認

また、日程についても、8月以降になる可能性もあり、決定した段階で周知することを確認